

第30号
2023.1

Medi-Way 医療通訳だより



◆新年を迎えて◆

東和通訳センター センター長 中牟田 和彦

「Medi-Way 医療通訳だより」は、新年1月に第30号の発行となりました。いつもお読みくださりありがとうございます。さて、年末年始も医療現場で過ごされた方々も多くおられたのではと思います。深謝申し上げます。この「医療通訳だより」は通訳者自身が体験したことを自ら文章にして少しでも皆さまに「そうそう」や「へえ」と思っただけで、その号の主人公たちは嬉しさを感じています。Medi-Way は今年も通訳品質に拘り、多くの皆さまに安心をお届けしてまいります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

日本とちょっと違うよ - 通訳者よもやま話 - Vol.9 ポルトガル語担当 赤城さん

私は大学を卒業してから3年間、日本語教師としてブラジルに滞在しました。とても充実した時間を過ごすことができましたが、その中で、私が感じた「ちょっと違うぞ」をご紹介しますね。

「お釣りは飴ちゃん？」

スーパーで買い物をする時、レジでお釣りと一緒に飴玉をもらうことがよくありました。最初は「??」でしたが、細かいセンタボ単位（小銭）のお釣りは飴玉で、ということでした。大きい街のスーパーでは見かけなかったもので、田舎ならではなのかもしれません。日本では考えられないですが、このおおらかさが好きです。



「また学校お休み？」

ブラジルの学校は午前・午後の2部制で、子ども達は学校の無い時間帯に日本語学校にきていました。公立の学校に通う子どもの保護者から、「先生、またグレイビ（ストライキ）なのよ…困るねえ…」という話を聞きました。教員の待遇が悪いためだそうです。学校でストライキというのも日本では考えにくいですね。



「感染症対策」

コロナ禍が続いていますが、ブラジルでは普段から感染症への注意が欠かせません。 Dengue熱やチクングニア熱、黄熱病など、蚊が媒介する感染症が多いブラジルでは、蚊の温床を作らないよう予防キャンペーンが盛んです。まだポルトガル語がよくわからない時に、アパートに突然水回りの消毒に来られた時はびっくりしました。



日本で暮らしているブラジル人の皆さんも、逆に日々「ちょっと違うぞ？」を感じながら生活されているかも…必要な時には、そんなギャップをフォローできるような通訳者でありたいです。

今月のトピックス

「ネイティブスピーカー」

「通訳さんはネイティブですか？」と質問を受けることがあります。ある言語を母国語として話す人、という意味なら、「日本語ネイティブ」も含まれるわけですが、それはさておき、東和通訳センターにはたくさんの外国語ネイティブスピーカーがいます。

通訳は、異なる言語の間の橋渡しですから、通訳者が2か国語以上話せるのは当然です。以上と書いたのは、時にスペイン語とポルトガル語を「両方話せます」という患者さんや、「フィリピンの方なのでタガログ語を」と依頼された際に通訳者が別対応していると「では、英語で」と切り替えてくださる例が少なからずあるからです。ただ、私たちが行うのは医療通訳であるため、やはり通訳者の専門言語は基本的に1つとなります。

「ネイティブ」つまり母国語とする、というわけで、言葉だけでなく文化や伝統を含めた通訳を行うことができます。例えばお医者さんが「お風呂はダメですよ」とおっしゃった時、湯船につかる習慣のある日本人と、その習慣のない外国の方なら理解が異なる場合があります。通訳者は「先生、シャワーもダメですか？」のように少し介入して確認を取るといったわけです。

日本語ネイティブではない通訳者は、当然ながら日本の医療用語とも奮闘しています。そんな中でのこぼれ話、またあらためてお伝えしたいと思います。

